



イギリス オックスフォード近郊 (解説 p.15)

# 地理・地図資料

帝国書院

2007年 10月号



## 英国の囲い込み農地

(写真：イギリス／オックスフォード近郊 帝国書院)

写真は、英国のオックスフォード近郊で撮影された農地である。羊と、遠くに石垣で囲い込まれた農地が見える。

羊毛は、中世から英国の特産品であった。英国で生産された羊毛はベルギー、オランダに輸出され、毛織物に加工後、ヨーロッパ中に輸出された。中世にフランドル地方といわれたこの地域では毛織物産業や通商により富を蓄積し、当時のヨーロッパで最も栄えた地域となった。その繁栄は英国の羊毛により支えられており、フランドル地方と英国とは密接な関係にあった。14世紀に始まった英仏の百年戦争の背景には、このフランドル地方をめぐる英仏、そしてこの地方に急速に勢力を拡張した「西方の大公国」ブルゴーニュ公国の3つの大国間の様々な思惑や駆け引きが存在した。

英国においても、他のヨーロッパの地域と同様に、かつては3年に一度土地を休ませて地力の維持を図る三圃式農業が行われていた。農民が穀物と家畜を消費する自給自足の色彩が強かったが、羊毛の輸出が盛んになるにつれて、貨幣を媒体とした近代資本主義体制に徐々に組み込まれていく。

「囲い込み」とは、かつて、細かい農地が相互に入り組み、収穫の終わった土地を次の種まきまで放牧地として共同で利用していた「開放耕地」を統合、所有権を明確にし、個々の農家が排他的に利用することをいう。

第一次囲い込みは、16世紀に、需要の増大した羊毛をより効率的に生産するために、個人主導で行われた。これにより、零細農民は共有地での放牧ができず生活が成り立たなくなったため、都市に移住して工場労働者などになることを余儀なく

された。このような状況を英国の思想家・トマス・モアは、「羊が人間を喰い殺す」、すなわち、村落共同体を破壊し、農民たちを放逐すると批判した。

第二次囲い込みは、18世紀に、議会主導で行われた。この時期に、農業の生産力を飛躍的に増大させる「ノーフォーク農法」と呼ばれる高度集約農法が三圃式農法の代わりに導入された。この農法は、共有地などの曖昧な所有権に基づく土地をなくし、農地の所有権を個人に明確に帰属させる必要が生じたものから、立法府がそれを後押ししたものである。

このような囲い込みの進展を背景に、都市労働者に対する安価な穀物の供給を目的とした19世紀の穀物法の廃止による関税の撤廃により、英国では国家としての資本主義と自由貿易体制が確立され、農業もその中に組み入れられることになった。その結果、英国の農業も、規模拡大が進み、国際競争力を有する産業に発展したのである。

現在、EU(欧州連合)の農業政策はCAP(共通農業政策)により統一されたが、その加盟国の中でもCAPに対する態度は一枚岩ではない。フランスは農業保護の継続とCAPの堅持を訴え、自由貿易的な改革には反対する一方、英国はCAPの保護削減などの改革に熱心で、CAPの改革が議論される場合、いつも両国は対立を繰り返してきた。この背景には、英国がフランスなどの大陸諸国に比較して、国際競争力を十分に有する近代的な農業部門を有していることに留意する必要がある。

参考資料：トマス・モア著 平井正穂訳『ユートピア』  
岩波書店 1957年

(農林水産政策研究所 上林篤幸)